

■ 論 文

キャンパス・コミュニティ・ファームを通じた世代間交流の可能性
—大学生が三世代交流に関わることの意義・影響—

桜井 政成¹,

(研究協力者)北川 千詠², 竹内 耀平³, 滝沢 雄太郎⁴, 高木 栄里香^{5*}

【要旨】 コミュニティ・ファームとは一般的に、地域の空き地(公地・私有地)を使って、地域住民が主体となり、農作物や果樹や花を植える場所や活動とされており、現在世界的に広く取り組まれている。本研究では、コミュニティ・ファームの多面的な効用のなかでも、そこでの多世代交流の促進について分析を行っていく。また、様々なタイプのコミュニティ・ファームがあるが、とくに大学において行われるもの(キャンパス・コミュニティ・ファーム)を対象とし、そこでの大学生の存在意義や効果を探索的に検証する。

本研究は事例として、立命館大学大阪いばらきキャンパスにおける「Oishi キャンパス」プロジェクトを扱う。また、本研究では調査のアプローチとして参加型・エンパワメント型のアクション・リサーチを採用した。学生自身がその成果について分析・考察を行うことで、取り組みの発展や自分たち自身の学びにもつなげるためである。またその調査プロセス自体は、Kolb の経験学習アプローチを参考に形成した。

イベント参加者・大学生への質問紙調査結果を、KJ 法を援用して自由回答を分類・図式化することによって、多世代交流のプロセスが見えてきた。また、その「図式化」を大学生達が自ら行うことによって、大学生達は自分たちの存在感や役割について学び取ることができた。

キーワード：コミュニティファーム, 多世代交流, 大学生

1. 研究の背景と目的

コミュニティ・ファームとは一般的に、地域の空き地(公地・私有地)を使って、地域住民が主体となり、農作物や果樹や花を植える場所や活動とされており、現在世界的に広く取り組まれている。Wakefield et al. (2007) は、コミュニティ・ファームを実施することにより、地域コミュニティには以下のようなきわめて多様な効果がもたらされることを、先行研究および自身の独自調査から指摘している。すなわち、食糧へのアクセスと栄養面の改善、運動機会の増加、精神面での健康改善、地域コミュニティ内での安全・安心の向上、教育／職業訓練を通じたコミュニティ開発の機会、社会的紐帯の発展と社会的多様性の理解を通じたソーシャル・キャピタルの増進、地域の自然環境と持続可能性の向上、である。日本でも、例えば後藤(2005)が「都市農業を核にしての人々の交流は、新たな地域コミュニティを作り出す萌芽になる可能性を大いに秘めている」(p.44)と述べているように、地域社会の課題解決・活性化に向けコミュニティ・ファームには一定の期待が持たれていると言えよう。しかしその取り組みについて、日本では研究的な注目はまだほとんど寄せられていない¹⁾。本研究では、コミュニティ・ファームの多面的な効用のなかでも、そこでの多世代交流の促進について分析を行っていく。

*1 立命館大学政策科学部・教授

2-5 立命館大学政策科学部・3 回生

「世代間交流」という語は国際的には、高齢者と子どもとの間での、知識や技術の交換を通じた互いの満足感の高め合い、と考えられがちである²⁾。しかし日本の社会的な文脈を鑑みると、この定義ではやや狭く捉えられてしまっているおそれがある。池田(2009)が指摘するように、日本における世代間交流は、親子を対象とした活動、幼児及び生徒といった異年齢間を対象とした活動、三世代交流のような複数の世代を対象とした活動を総称する用語となっている。そのため名嘉・得丸(2012)は、「文化的・社会的背景が異なる米国における世代間交流の定義とわが国のそれとでは、特に『意図性』及び『継続性』の観点から、一致する概念であるとは言い難い」(p.52)と述べる。むしろ、草野・秋山(2004)が提唱するように、「子ども、青年、中年世代・高齢者がお互いに自分たちの持っている能力や技術を出し合って、自分自身の向上と、自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを実践する活動で、一人ひとりが活動の主役になること」といった意味合いで理解する方がよいだろう。

世代間交流については、政策的な意味合いとして、ひとつには社会福祉の観点から注目されてきた経緯がある。1994年の『21世紀福祉ビジョン』において世代間交流の必要性が強調されて以降、世代間交流の取り組みが盛んに行われてきた(七木田ら, 2007)。例えば、1996年に閣議決定された『高齢社会対策大綱』には、高齢者と若者世代との交流の機会を確保することが記され、続く2001年の改正では、世代間の連携強化が記されている。さらに、2000年代中頃から、学校教育においても世代間交流への期待が高まっている。2006年に改正された教育基本法では、学校・家庭・地域住民等の相互の連携協力に関する規定が盛り込まれており、文部科学省では2007年度に『放課後子どもプラン』、2008年度には『学校支援地域本部事業』といった、地域住民による子どもの教育支援施策を創出している(村山ら, 2013)。実際、築山ら(2006)の京都市・神戸市の教育施設や福祉施設を対象とした調査では、回答施設の60%で何らかの世代間交流の取り組みが実施されていた³⁾。

コミュニティ・ファームにおける世代間交流の促進の観点から、本研究が焦点を充てるのは、そこでの大学生にとっての意義や学びである。大学生が幼児や子ども、または高齢者と交流する中で得られる、大学生自身への効果は、これまでにいくつか研究がなされてきている(例えば金谷, 2008や、小杉ら, 2011、中川, 2010など)。しかしそれにとどまらず、大学生は世代間交流において、特有の存在意義を示す可能性があることも、先行研究では度々指摘されてきている。例えば石野(2013)は、大学生ボランティアが地域に与える影響を「よそ者」論から考察しているが、それによれば、彼らは「不安定さ」のなかで、多様な関係性を構築しているという。

「世代的に中間に位置するということに加え、利害関係のない彼ら(筆者注:大学生)は、これまで交ざることがなかった高齢者と子供などの多世代や様々なグループを横断的に繋ぐ役割に向いている。また、住民同士だと煮詰まったり、拮抗する場合も、学生が入ることでふと緩み、新しい流れが開けることもある。そしてその前提には、学生はその特異性ゆえ外から入ったよそ者にも関わらず住民の警戒心を緩め、受け入れられやすいという作用が働いている。」(p.11)

このことから、大学生は、世代間交流の「援助者」としても機能することがある、という命題を導くことが出来るだろう。金森(2012)は、世代間交流においてはやもすれば、主役間での双方向の交流(二世代間交流)についてのみ注目されがちだが、それを企画する「援助者」との三方向の交流(三世代間交流)も無視できないことを指摘する(p.65-77)。ただし、金森(2012)の研究は幼児と高齢

者の二世代交流についての先行研究の整理であり、「援助者」は保育者（幼稚園や保育所の教諭が幼児と高齢者を交流させるケース）や介護者（介護施設等の職員が利用者である高齢者と幼児を交流させるケース）となっている。また先述の石野（2013）においても、交流を先導した「コーディネーター」は外部の者であった。

まとめると、先行研究からは大学生は世代間交流のなかで効用を得ており、そしてその交流自体も円滑に進める作用を持ち得ることが指摘されている。それは彼・彼女らの「立ち位置」（世代的に中間であることや、「よそ者」であること）にも関係していることが先行研究からは指摘されているが、それはまだ十分に明らかとは言えない。さらには、その大学生自身が「援助者」、「コーディネーター」として振る舞うことで促進される「三世代交流」に注目したものは少ない。そのため本研究では、大学生が三世代交流に主体的に関わることでの意義・影響を探索的に分析していく。

Ⅱ．調査の方法

Ⅱ．１ 調査分析の理論的枠組み

本研究では、アクション・リサーチと整理される調査・分析的方法的なアプローチを用いる。武田（2011）によれば、アクション・リサーチとは多様で幅広い定義を持ち、「質的研究を総動員して、社会変革というテーマを研究する」(Parker, 2008: p.173) ものとも理解されている。しかし、近年注目・強調されているのは、「課題や問題を抱える組織あるいはコミュニティの当事者が研究者と協働して、探究、実践、そしてその評価を継続的に螺旋のように繰り返して問題解決や社会変革、さらには当事者のエンパワメントを目指す調査研究活動」としての参加型・エンパワメント型のアクション・リサーチであるという。その定義に基づけば、地域住民の参加が不可欠であり、そしてその成果は、調査者たる地域住民自身の学びや成長（あるいは地域資源としての人的資本やソーシャル・キャピタルの蓄積）ということになる。本研究では、その調査者とは、地域住民全般ではなく、大学生を指す。そのため、本研究の実施には多世代交流活動を行った大学生自身も協力している。執筆者はその大学生を指導する立場の教員であり、大学生達の企画準備段階の姿や、コミュニティ・ファームでのイベント等におけるやりとりを観察している。

そして、そのプロセスの理論的な枠組みとして、Kolb(1984)が提示した経験学習モデルを援用している。Kolb は学習を、「経験－内省のプロセスを通じて、経験そのものを変換し、ルール・スキーマ・知識をつくりだすプロセス」としている(Kolb & Kolb 2009)。さらに経験学習モデルでは、経験を通して構築されたスキーマや理論が、アクション(実践)されてこそ意味がある(中原, 2013)。このことより、本研究のようなアクション・リサーチとは相性がよいと考えた。経験学習モデルは、4つの学習のプロセスがあり、それが循環するサイクルの中で発展していく。ここではそのサイクルを構成する各プロセスについて、中原(2013)の詳説を参考に、以下、整理しておく。

まず、①具体的経験である。これは現場での経験を指し、学習者が環境(他者・人工物等)に働きかけることで起こる相互作用のことをいう。次に、②内省的観察である。これは、「ある個人がいったん実践・事業・仕事現場を離れ、自らの行為・経験・出来事の意味を、俯瞰的な観点、多様な観点から振り返ること、意味づけること」を指す用語とされる。いわゆる「ふり返し」である。そしてその後、③抽象的概念化の段階となる。これは、経験を一般化、概念化、抽象化し、他の状況でも応用可能な知識・ルール・スキーマやルーチンを自らつくりあげることが指す。最後に、④ 能動の実験である。この段階では、それまでに創り出された知識やスキーマや理論から新たなアクションを導き出す。

そしてまた、後続する経験や内省へとサイクルは循環していくことになる。

経験学習モデルにおいては、「能動的実験・具体的経験」と「内省的観察・抽象的概念化」という二つのモードが循環しながら、知識が創造され、学習が生起すると考えられている(Jarvis, 1995; 中原, 2013)。実際にコミュニティ・ファームを運営し、現場での学習(調査)を経験するというのが、経験学習モデルの「能動的実験・具体的経験」に当たる。そしてそこから収集したデータを考察し、一般的な概念に落とし込む作業は「内省的観察・抽象的概念化」となる。ここでのファーム運営者は、研究者(調査者)でもある。

この経験学習モデルに従い、本研究における調査ステップとしては、①まず「具体的体験」として実際に、市民・大学生・子どもの世代間交流を促すプロジェクトを立ちあげ、運営した。そしてその中で、②「内省的観察」として、自由記述形式の質問紙法を用いて、参加者と運営者(援助者)である大学生の意見のデータの収集をした⁴⁾。さらにそのデータを元に、③「抽象的概念化」の段階として、KJ 法を利用して、データの分析を行った。この分析を行う際には、研究目的に即して、「大学生が世代間交流にどんな影響を与えたのか」という、大学生が三世代交流に関わることでの意義・影響が明らかとなることを意識して行った。なお、それを踏まえての④「能動的実験」は、次年度以降のファームの活動によって取り組まれることを想定している。執筆者はこうした調査のプロセスに指導的に関わり、大学生が研究を通じて自己の学びを深める(参加型・エンパワメント型のアクション・リサーチ)ことを促すとともに、その観察に基づいての考察も行い、その結果も本稿の記述に含めている。

また、KJ 法は本来、理論生成法や分類法ではなく発想法であり、アイデアを探索的に創り出す方法であるが、研究面では分類や図示の方法として、KJ 法そのものよりも、そのスキームが応用される場合が多い(寺下, 2011)。質的調査分析においては、より洗練された方法として、例えばグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)等も存在している。しかしながら、本研究ではアクション・リサーチという性質上、学部が学生が中心となり調査分析を行っており、その熟練度を考慮した際に、難易度が高い方法だと分析結果に齟齬が起きるおそれがあった(寺下, 2011)。このため、より簡易な方法を用いることで、大学生自身が、自ら行った分析内容を理解し、解釈ができることに力点を置いた。したがって、今回の分析法は KJ 法そのものというよりも、KJ 法を援用した質的データ分析における基礎的なコーディングとカテゴライズによる検討、という形式を採用している。なお具体的な手続きについては、執筆者の教員からの指導の元、KJ 法の基礎的な理解のために田中(2010)を読み、さらに応用的な調査分析への援用方法の参考として、西村・長野(2012)に習うことで、分析を行った。

Ⅱ. 2 事例: OIC コミュニティ・ファームにおける Oishi Campus プロジェクト

本研究では調査対象として、立命館大学大阪いばらきキャンパスに5月から開設した「OIC(オーアイシー)コミュニティ・ファーム」における、大学生を中心とした「Oishi(おいしー)Campus」プロジェクトでの世代間交流について検討する。これは2015年4月に使用が開始された立命館大学大阪いばらきキャンパス(以下、OICと略記する)の敷地内に作られたものであり、2m×10mのスペースに畑やプランターを使用しファームを開園した。

そもそも立命館大学を運営する学校法人立命館では、2020年を見据えた学園ビジョン(R2020)を定め、その基本計画として、「教育、研究、学生生活を支えるキャンパスづくり」を目標のひとつに

掲げ、既存キャンパス(衣笠・BKC)の整備と、大阪いばらきキャンパスの開設に向けた準備を進めた⁵⁾。そして2015年4月に開設された大阪いばらきキャンパスには、経営学部・経営学研究科、政策科学部・政策科学研究科、テクノロジー・マネジメント研究科、経営管理研究科が移転した(2016年4月には総合心理学部を設置予定)。そしてOICでは、都市に立地するキャンパスの特性や、大阪いばらきキャンパスに展開する学部・研究科の特徴を活かした3つの教学コンセプトを掲げ、これらを軸としたキャンパス創造・教学展開を進めている。その3つとは、「アジアのゲートウェイ」、「都市共創」、「地域・社会連携」であり、そのうちの「地域・社会連携」に関連し、OICファームは開設された。OICでは開設前より、食や農を通じたコミュニティづくりや地域おこしというテーマで、教員、ゼミ、サークルが活動を開始していたが、キャンパスコンセプトと合致した学生・教職員と一般市民や地域を結ぶ取組みとして、OICファームの取り組みはスタートしたのである⁶⁾。そしてその活動を支援することを目的として、コミュニティファームエリアを設定すると共に、このエリアを利用する団体が募集された。

そして「Oishi Campus」は、立命館大学政策科学部の科目「政策科学特別演習(コミュニティディベロップメント)」の受講生を中心とした大学生、および市民による支援メンバー(以下、市民サポーターと記述)によって結成され、2015年5月より活動をスタートさせた。市民サポーターは茨木市都市企画課主催の2015年度の市民向け講座「いばらぼ」に集まった人たちを中心に組織化された。市民サポーターの中には野菜作りの知識を持った方たちもおられ、野菜育成の指導も学生に対してなされた。さらに、この「Oishi Campus」では5月以降、毎月1回イベント(主に子ども向け)を企画し実施していき、親子連れなどが参加し、多世代による交流が促進されていった。植えたものは10種類以上の季節の野菜であり、週に数度の水やりを市民と共同で行った。2015年度にこのプロジェクトに参加した市民は50名を超え、約半数は子どもであった。2015年度に実施したイベントの詳細は表1の通りとなっている。

表1. 各イベントの詳細

	日付	プログラム内容	参加人数
1回目	5月17日	・ 夏野菜の苗植え(畑開き)	子ども16人 市民14人
2回目	6月14日	・ サツマイモの苗植え ・ 横断幕作り ・ サツマイモ畑の枠のペイント	子ども13人 市民9人
3回目	8月6日	・ 野菜お絵描き大会 ・ 野菜クイズ大会	子ども3人 市民2人
4回目	10月23日	・ 冬野菜の種まき	子ども9人 市民5人

Ⅲ. 調査結果

Ⅲ. 1 世代間交流の「具体的経験」としての「Oishi Campus」

当初、「畑を始める」というのは教員側からの提案であり、必ずしも参加学生全員がその取り組みに積極的に関わったわけではなかった。また、「世代間交流」を目的にするというのも、当初から学生に共有された目的ではなかった。5月17日の畑開き前後、学生達は次々に準備や日常的な管理などの業務が発生する中で、その実務上の話合いが先行していた。学生達が世代間交流を意識したのは、まず、その初期段階においての市民や、イベントに参加した親子連れとの交流にあったのは間違いない。年配の市民サポーターから大学生が聞いたという話が象徴的である。その市民サポーターにとって、孫の世代はイベント参加者である幼児ではなく大学生と同じ程度であり、そのため大学生との交流が楽しい、と語ったという⁷⁾。そして大学生達は、後段に述べる様々な補助金申請書類を作成する過程において、自分たちの活動の目的を明確に確認していった。

そのような中、Ⅲ.2で詳述する、6月のイベントでの参加者アンケートの内容の分析は、大学生達が世代間交流における自分たちの存在意義を考える上で、きわめて重要な契機となった⁸⁾。それは、先述の科目、「政策科学特別実習(コミュニティディベロップメント)」授業内で行われ、受講学生全体でイベントのふり返し(reflection)を行った際の出来事である(2015年6月17日)。話合いの前半、大学生達は思ったように市民間の世代間交流が進んでいないこと(あるいはイベント運営自体の稚拙さ)を、自分たちの未熟さ、欠点と捉え、イベントの成果を否定しがちであった。しかしながら、アンケート結果を共有することで、そうした意識は変化していった。そこに書かれていたのは、参加者からの大学生達への、感謝や応援の声もあった。とりわけそのなかで、「まだまだ手探り感があったが、そこが良い」や、「子どもの面倒を見てくれてありがとう」と書かれたコメントから、大学生達は自分たちの行っている取り組みの「価値」を見出した。すなわち、稚拙でも、自分たちが行うことに意義があり、そして、自分たちはその世代間交流の外側に存在するわけではなく、一端を担う存在であることを意識したのである。このことは、その後の活動の方向性にも影響していった。

とはいえ、取り組みが初年度だったこともあり、本プロジェクトの実施においては、度々「危機」が訪れた。第一に市民グループの解散である。先述のように、市民のサポートメンバーは茨木市都市企画課主催の2015年度の市民向け講座「いばらば」の受講生が中心と述べた。当初、この受講生は継続的な活動を企図して、講座後も会議や活動を重ねてきたが、6月の時点で解散が決定してしまった。そのため、市民のサポーターを改めて組織化しなければならない事態が発生した。また、別の問題として、予算についても苦労があった。当初、大学からの、学生の自主活動に対する補助金を受ける予定であったが、選考の過程で外れてしまい、学生達の見論が外れてしまった。そのため、教員の研究予算を用いると共に、学生達は改めて別の補助金に申請したり、資金捻出のために別の活動をする必要が出るなど、いくつかの手段を後から講じていかなければならなかった。そうした危機を乗り越えコミュニティ・ファームを運営し続けることは、(多世代交流とは関係ないが)大学生達の学びにつながったとも考えられる。

Ⅲ. 2 「内省的観察」・「抽象的概念化」としての KJ 法による自由記述の分析

Ⅲ. 2.. 1 市民サポーター・イベント参加者からの意見の分析

前述の通り、経験学習モデルにおける「内省的観察」の段階にあたるものとして、取り組みについて

の幅広い感想のデータ収集を行った。そして「抽象的概念化」のために分析・考察を行った。ここではその手続きと直接的な結果を述べておきたい。データ収集は無記名自己記入方式による自由記述形式の質問紙法を用いて、市民(主に親子連れを中心としたイベント参加者と市民サポーター)と、大学生に対し行われた。市民に対しては6月14日のイベント時に記入と回収を行ったが、その質問は、「これまでの『OICファーム』また、『OICファーム』でのイベントにおける、良い点・悪い点についての意見をください」というものであった。大人9名のうち全員から回答を得ている。また大学生に対しては11月の授業時に行ったが、『OICファーム』また、『OICファーム』でのイベントについての気づきを教えてください」と尋ねている。そして、収集した自由記述データを調査目的に沿った観点から、「大学生が世代間交流にどのような影響を与えているか」という視点でコーディングと分類を行い、考察に結びつけた。

市民から得た回答の中から、質問の意図から外れている回答や、分類不能なものを省くと、36項目の意見(KJ法における「ラベル」)が抽出された。大学生自身が行ったKJ法の応用的利用によるコーディングとカテゴリ化の結果、大きく4つのグループ(大カテゴリ)にまとめられた。グループ編成の結果と各グループの内容を以下に示す(表2参照)。

表 2. KJ 法による参加者アンケートのグループ編成結果

大カテゴリ	サブカテゴリ	頻度	代表的な意見ラベル(記述例)
応援	期待	2	また、様々な企画を楽しみにしております。
	手探り	1	まだまだ手探り感がありますが、そこが良いところだと思います。
	懸命さ	1	学生の皆さんが一生懸命されていて良かったです。
非日常的体験	収穫	6	新鮮な野菜を頂けて良かった。
	貴重な体験	4	子どもの面倒を見てくれてありがとう。 家とは違う子どもの笑顔が見られた。
	地域貢献	2	大学をこのように地域に開いて頂いて、とても良いことだと思う。
教育的機会	教育的経験	8	子どもたちに野菜作りを体験させたいと思ったので。
	お絵かき	3	絵の具塗りが楽しそうで良かった。
	生育	2	さつまいも植えができた。
	指導	2	さつまいもの説明等分かりやすかった。
不満	イベントの準備・進行	3	移動が多かった。空き時間が多かった。
	生育状態	2	夏野菜の生育状態が思ったより悪かった。
合計		36	

1つ目のグループには、「がんばってください」、「楽しくなるような時間を一緒に考えていきたい」、「まだまだ手探り感があつたが、そこが良い」といったラベルが集約されている。「『Oishi Campus プロジェクト』への賛同」を意味する内容であった。このため、この意見ラベルの集まりを「応援」という大カテゴリに分類した。

2 つ目のグループには、「子どもの面倒を見てくれてありがとう」、「家とは違う子どもの笑顔が見られた」、「大学をこのように市民へ開いてくれてありがとう」、「新鮮な野菜を頂けてよかった」といったラベルを集約した。「Oishi Campus プロジェクト」へ参加することが、日常ではない特別なことであって、これにより市民へ「非日常的な体験」が提供されていることが明確となった。ここには世代間交流への満足的意識も含まれるが、全体としてここに含む内容から、この意見の大カテゴリを「非日常的体験」と命名した。

3 つ目のグループでは、「子どもたちに良い体験になる」、「普段なかなか体験できないこと」、「子どもと自然に触れたい」、「田植えなど他の農業体験もしたい」、「子どもに収穫体験をもっとさせたい」といったラベルが集約された。「Oishi Campus プロジェクト」へ参加し、野菜づくりをすることが子どもへの教育につながるという、子どもへの「教育的機会」であると市民が考えていることが明白となった。このようなことから、この意見のグループを「教育的機会」と名付けた。

4 つ目のグループでは、「移動が多い」、「時間が空いた」、「植物の成長が悪い」「準備が悪い」、「夏の晴れた日での野外活動は暑い」といったラベルが集約され、『OIC ファーム』また、『OIC ファーム』でのイベントにおける市民の不満が明らかとなった。このような内容から、この意見グループの大カテゴリを「不満」と分類した。

Ⅲ. 2. 2 大学生からの意見の分析

Ⅲ.2.1 と同様に、11 月の授業時に行った、大学生に対しての意見徴収への回答の分類結果を述べる(14 名分)。意見ラベルの中から、質問の意図から外れている回答や分類不能なラベルを省くと、33 枚のラベルが抽出された。それらを、学生生達が KJ 法の援用によってグループ編成を行った。その結果、大きく 6 つのグループ(大カテゴリ)にまとめられた。グループ編成の結果と各グループの内容は表 3 の通りである。

初めのグループでは「子どもとのふれあいが楽しかった」といったラベルが集約された。この内容から、この大カテゴリを「子どもとのふれあい」と命名した。

2 つ目のグループでは、野菜づくりの大変さを体験したことによる「野菜へのありがたみを感じた」という意見や「農家さんの存在意識を持つようになった」という意見(サブカテゴリ:農家への意識)、また「農業に関する興味関心を子どもの頃から持つようになることで『将来、農業をしてみたい』という気持ちが芽生えることにつながる」(サブカテゴリ:将来への期待)といったラベルが集約された。これらをまとめるグループ名としては、「食育」と名付けるのが相応しいと考えられた。

3 つ目のグループでは、「野菜の成長を見ることができたのがうれしかった」などといったラベルが集約され、野菜づくりや「Oishi Campus プロジェクト」の運営などの物事を一から作る手間をかけたからこそ感じる喜びが見られた。この大カテゴリを「やりがい」と命名した。

4 つ目のグループでは、「畑の前を通る人との交流があった」という意見や、「子どもと接する機会があって良かった」というもの。また、「市民の方と接する貴重な機会となった」といった意見ラベルが集約された。これは、野菜づくりを通して、様々な(世代間を中心とした)交流が生まれたことへの意識が表出していると言える。このことから、この大カテゴリのグループを「出会い」と名付けた。

5 つ目のグループでは、「大学が地域に対して開かれた存在だと思った」という意見や、「イベントの参加者を集めるのは困難だと思っていたが、大学周辺に市民がいたため意外にも多くの参加者が集まった」といった意見ラベルを集約した。ここでは、大学が気軽に訪れやすい場となっていること

が見えた。これは、大学の立地自体やキャンパスデザインの影響が大きく、そのことが市民にとって親しみやすい場を形成しており、結果的に今回の取り組みにも関連し、学生達がそれを実感したと考える。この大カテゴリのグループを「親しみやすさ」と命名した。

6つ目のグループでは、「野菜作りはマニュアル通りにはいかなかったが、だからこそ皆が結束し、試行錯誤した」という意見や、「子どもたちとの関わり方が始めはわからずに悩んだ」というものや、「何度もイベントに参加しやすい仕組みを作る必要があった」といったラベルをまとめた。これらは、コミュニティ・ファームの取り組みにおける改善点や未成熟な点の指摘であり、このグループは「不完全性」と名付けた。

表 3. KJ 法による大学生アンケートのグループ編成結果

大カテゴリ	サブカテゴリ	頻度	代表的な意見ラベル(記述例)
子どもとのふれあい		4	子どもとのふれあいが楽しかった
食育	将来への期待	1	子どもの頃から野菜に触れる機会が多くなれば、将来農業に携わりたいと思う人が増え、農家不足も解消するのではないかな。
	農家への意識	2	普段何気なく食べている野菜が実際に育ててみるとこんなに大変なのだと感じた。
	野菜生育	1	野菜のことを知ることができた。
やりがい		5	野菜の成長を見られたことが嬉しかった。
出会い	見ず知らずの人との交流	3	畑の前を通る人に「成長が気になる」「いつも見ていますよ」など声をかけてくれてよかった。
	子ども	1	子どもと接する機会があってよかった。
	市民	1	市民と接する機会を得られて楽しかった。貴重な機会だった。
親しみやすさ	大学の持つ	1	大学が地域に開かれた存在であると思った。
	大学生の持つ	2	イベントをするにあたっての集客について、地域の人を集めることは容易ではなかったが、意外にも多くの人をあつめることができた。
不完全性	野菜づくりでの失敗	4	野菜は生き物だから、必ずしもマニュアル通りにはいかず、困ったこともあったけど、マニュアル通りにはならないこそ、育てる皆が一致団結して試行錯誤した。
	子どもとの関わり方	1	子どもたちとの関わり方が始めはわからずに悩んだ。
	運営上の課題	5	リピーターが来やすいような制度にする必要があった。
合計		31	

IV. 考察とまとめ

本研究の目的は、コミュニティ・ファームにおいて大学生が三世代交流に関わることでの意義・影響を探索的に分析することであった。そしてそのために、参加型・エンパワメント型のアクション・リサーチとして、研究に参加した大学生達が、自ら研究テーマに関して学びを深めることも企図していた。経験学習アプローチによって、具体的経験に基づいた「内省的観察」・「抽象的概念化」を行うため、前章の通りKJ法の援用によってカテゴリ化したが、さらに、大学生自身の手によって、双方のカテゴリを合わせて総合的に項目間のつながりを分析し、「コミュニティ・ファームで大学生が三世代交流に関わることの意義・影響」の考察を行った。

なお、その整理したものは図1の通りである。

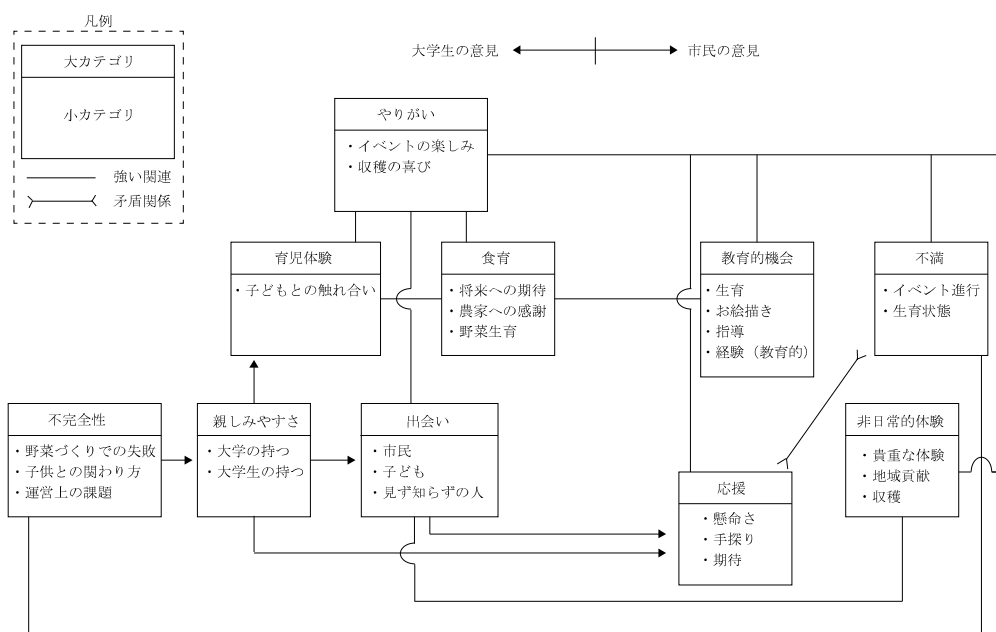


図1. コミュニティ・ファームで大学生が三世代交流に関わることの意義・影響

自由回答を図式化することによって、次のようなプロセスが見えてきた。すなわち、キャンパス・コミュニティ・ファームでの多世代交流は、まず一般市民にとっては、大学のキャンパスという「非日常」が舞台となることで、子どもの教育面での期待も持ちつつ、その参加意識が高められていた。そして、大学生に対しては、運営への不満を持ちつつも、他方でその未熟さを受け入れ、むしろ懸命さや手作り感を楽しんでいた。また大学生と子どもとのふれあいに満足している姿もあった。

他方、大学生にとっては、野菜作りという慣れない仕事に携わることの不安もありつつ、市民の参加者と同様に、子どもとのふれあいを楽しんでいた。また、それ以外の多世代と関わることの有意義さも実感していた。大学のキャンパスは市民にとっては非日常であるが、大学生達にとっては日常であり、リラックスして取り組んでいたようだ。

さらにアクション・リサーチとして、この「図式化」を大学生達が自ら行うことによって、大学生達は自分たちの存在感や役割について学び取ることができた。前述のように、当初、大学生達は自分た

ちの取り組み方について、野菜の生育の知識もなく、またイベントでの多世代交流も思ったように促進できないことから、その未熟さや不十分さを嘆いていた。しかしながら、それはこのコミュニティ・ファームの取り組みにおいて、一面的な姿でしかなかったことを理解した。

そしてそのことについて、さらに大学生らは「抽象的概念化」を行っていく過程において、金子(1992)の「ヴァルネラビリティ」概念に注目することで理解を深めた。金子(1992)は著書の中で、「ヴァルネラブルであるということは、弱さ、攻撃されやすさ、傷つきやすさであるとともに、相手から力をもらうための「窓」を開けるための秘密の鍵」でもあり、「弱さの強さであり、それゆえの不思議な魅力がある」と述べている(p.209)。そして、「情報のヴァルネラビリティは、弱さであるとともに力の源なのであるから、その発生を未然に防ぐとか、規制するということでは問題の解決にならない。ヴァルネラブルなものであるから、その恩恵を受けるものがみんなでサポートする、というアプローチが必要だ。(中略)つまり、その恩恵を受ける可能性のある人たち全体が、それぞれ応分の役割を果たすことで成立するシステムとしてサポートすることが肝心であろう」と述べている(p125)。確かに、本取り組みにおいて大学生達は、「不完全」な存在であった。

例えば、野菜育成に関して、育てる植物の育成方法、肥料のまき方、間引きの仕方、土の作り方など学生は十分な知識を持ち得ていなかった。加えて、大学生は世代間コーディネーターのように「援助者」としてはプロフェッショナルのスキルを持っているわけではなく、子どもや市民との接し方(人間関係)やイベント企画・運営方法などについても精通していない。そのことに関連して、イベント参加者から集めた回答からも、「(イベントのプログラム間に)少し時間があいた」「思ったよりナスの成長が悪かった。」などの不平・不満が聞かれた。しかしながら、大学生達はそうにわからないことが多数ありながらも、市民サポーターなどからアドバイスを受けながら、生育に携わる姿や、積極的にイベントを実施しながら交流の場を多く作る姿勢を見せることで、市民の関心を誘発したと考える。つまり専門知識を持たないという「不完全」な弱い立場のまま、一般の市民に参加を呼びかけることは、主催者として脆弱な立場に身を置くことになるが、その「不完全性」は必ずしもマイナスな要素ではなかったことを、大学生達は先述の「図式化」から改めて理解したのであった。彼・彼女達は、多世代交流を促す「支援者」であろうとしつつも、知らず知らずのうちにその「主役」になっていたことを、この抽象的概念化の作業から確信したのであった。

本研究では、コミュニティ・ファームの中で、大学生が世代間交流のなかで得ている効用と、その交流に与える意義を分析した。本研究は探索的なものであり、学術的な成果については、それほど明確とは言えない。しかしながら、大学生の「立ち位置」に注目したとき、大学生の未熟さ、不完全性といった「ヴァルネラビリティ」が、大学生自身や他の世代への意識、そして交流の取り組み全体にポジティブ・ネガティブな影響を与えながら、促進されている構造が確認されたことは意味があるものとする。さらに今回の取り組みでは大学生自身が「援助者」、「コーディネーター」として振る舞っており、そのことが大学生達を(当初本人達は気づいていなかったが)、より多世代交流の「主役」にしたことも興味深い。また本取組には、大学のキャンパスという舞台装置が影響していたことも、その特色として明確に見られたことも指摘しておきたい。このことは大学の地域貢献関しての議論、あるいはキャンパス・コミュニティ・ファームの可能性の議論に一定の寄与をしたと考える。

本研究は(キャンパス)コミュニティ・ファームの多面的な意義・役割を理解するための一端を明らかにしたに過ぎない。また、経験学習モデルにおける、最後のステップである「能動的実験」の段階は、次年度に持ち越されている。今後も引き続き、その実践を継続する中で、より理解を深めるべく、研究を行っていきたい。

付記

本研究は、2015 年度 立命館大学 OIC 総合研究機構・地域情報研究所重点研究プログラム「地域連携・都市共創・アジア競争学創成の国際 PBR/PBL 研究」プロジェクト(代表:宮脇昇)の一環として行われた成果の一部である。

[注]

- 1) なお欧米では、地域での畑を「コミュニティ・ガーデン」と総称するのが一般的であるが、日本では「ガーデン」は園芸＝草花の庭を指すことが多く、そのように称しても野菜や果樹を植えるケースは少ない(逆に欧米では、ファームというと、巨大な畑をイメージされる)。このような背景により、本研究では日本での誤解が少ないように、「コミュニティ・ファーム」の語を統一して用いる。
- 2) 例えばイギリスの世代間事業国際コンソーシアム(<http://www.centreforip.org.uk>)や、アメリカの多世代連合(<http://www.gu.org/HOME.aspx>)といった推進組織の定義を参照。サイトの閲覧日はどちらも 2015 年 2 月 7 日。
- 3) 同調査での対象施設の種別は、保育園、幼稚園、児童館、特別養護老人ホーム、ケアハウス、老人福祉センター、デイサービスセンター、グループホーム、小学校、中学校などとなっている。
- 4) なお、大学生においては、企画のふり返りを集団ディスカッションの形でイベント(後述)の後に毎回、行ってきた。しかしその内容は、経験学習モデルを意識したものではなく、個別に「抽象的概念化」を行ったわけではなかった。本研究では、そこでのふり返りも含みつつではあるが、主としてこの質問指標調査のデータを「抽象的概念化」に用いた。
- 5) 以下、立命館大学ウェブサイト(<http://www.ritsumeai.ac.jp/rs/r2020/campus/oic/about/concept.html/>)の記述に基づく。2015 年 1 月 26 日閲覧。
- 6) ここの記述は、2015 年 4 月 20 日 OIC 地域連携室会議で確認された、OIC コミュニティファームエリアの設定と活動団体募集文の文面に基づいている。
- 7) 話があった具体的な日付は不明であるが、学生の語りは 5 月 17 日後のふりかえりにて出されたものを参考。
- 8) 以下の記述は、本稿執筆者の桜井による観察である。なお桜井は「政策科学特別実習(コミュニティディベロップメント)」の科目担当教員である。

[参考文献]

- 池田祥子, 「米国のインタージェネレーショナルプログラム世代間交流効果—人間発達と共生社会づくりの視点から」 草野篤子・金田利子・間野百子・柿沼幸雄編著, 『世代間交流効果—人間発達と共生社会づくりの視点から』, 三学出版, 2007 年, 148-150 頁.
- 石野由香里, 「『学生ボランティア』の特異性が地域に対して有する潜在的な機能—ボランティアをする/される関係をズラす効果が地域の場づくりへ与えた影響」, 『生活学論叢』, 23, 2013 年, 3-17 頁.
- 金森由華, 「高齢者と子どもの世代間交流—交流内容を中心に」, 『愛知淑徳大学論集(福祉貢献学部篇)』, 2, 2012 年, 65-77 頁.
- 金子郁容, 『ボランティア—もうひとつの情報社会』, 岩波書店, 1992 年.
- 金谷有子, 「大学生と幼児との世代間交流の重要性についての探索的研究」, 『埼玉学園大学紀要(人間科学部篇)』, 8, 2008 年, 119-127 頁.
- 草野篤子・秋山博介, 「インタージェネレーションの必要性」, 『現代のエスプリ』, 至文

- 堂, 444. 2004 年, 5-8 頁.
- 小杉ももこ・清水忠男・佐藤公信, 「世代間交流促進におけるデザイン関与の可能性—ケアハウスの取り組みを例として—」, 『デザイン学研究』, 58(1), 2011 年, 77-84 頁.
- 後藤光蔵, 「都市農業・農地の今日的役割と課題」, 『土地と農業』, 35, 2005 年, 43-58 頁.
- 武田丈, 「ソーシャルワークとアクションリサーチ」, 『ソーシャルワーク研究』, 37(1), 2011 年, 46-54 頁.
- 田中博晃, 「KJ 法入門—質的データ分析法として KJ 法を行う前に」, 『より良い外国語教育研究のための方法』(外国語教育メディア学会関西支部メソドロジー研究部会報告論集), 2010 年, 17-29 頁.
- 寺下貴美「第 7 回 質的研究方法論—質的データを科学的に分析するために」, 『日本放射線技術学会雑誌』, 67(4), 2011, 413-417 頁.
- 築山崇・黒澤祐介・草野篤子・角間陽子, 「世代間交流の実態調査報告—京都市・神戸市のアンケート調査より」, 『福祉社会研究』, 7, 2006 年, 123-129 頁.
- 名嘉一幾・得丸定子, 「世代間交流プログラム実践及び評価の検討—客観的評価としてのストレス度測定を導入」, 『日本家政学会誌』, 63, 2012 年, 51-60 頁.
- 長岡健, 「経営実務教育におけるフィールド調査法学習プログラム—体験型授業開発のアクション・リサーチ」, 『産業能率大学紀要』, 27(2), 2007 年, 1-25 頁.
- 中川恵里子, 「ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性」, 『生涯学習基盤経営』, 34, 2010 年, 99-112 頁.
- 中原淳, 「経験学習の理論的系譜と研究動向」, 『日本労働研究雑誌』, 639, 2010 年, 5-14 頁.
- 七木田敦・上村眞生・岡花祈一郎・若林紀乃・松井剛太, 「世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究」, 『幼年教育研究年報』, 29, 2007 年, 65-71 頁.
- 西村麻希・長野恵子, 「現代青年の友人関係のあり方に関する質的研究—KJ 法による自由記述の分析を通して」, 『西九州大学健康福祉学部紀要』, 43, 2012 年, 31-38 頁.
- 村山陽・竹内瑠美・大場宏美・安永正史・倉岡正高・野中久美子・藤原佳典, 「世代間交流事業に対する社会的関心とその現状—新聞記事の内容分析および実施主体者を対象とした質問紙調査から」, 『日本公衆衛生雑誌』, 60(3), 2013 年, 138-145 頁.
- Jarvis, P., *Adult and continuing education: Teaching, Learning and Research*, New York: Routledge, 1995.
- Kolb, D. (1984) *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*, New Jersey: Prentice-Hall.
- Kolb, A. Y. and Kolb, D. A., “Experiential learning theory: A Dynamic holistic approach to management learning, education and development,” Armstrong, S. J. and Fukami, C. V. eds., *The SAGE handbook of management learning, education and development*, Los Angeles; London: SAGE, 2009, pp.42-68.
- Parker, I., *Qualitative Psychology: Introducing Radical Research*, Maidenhead: Open University Press, 2004 (=八ッ塚一郎訳『ラディカル質的心理学—アクションリサーチ入門』, ナカニシヤ出版, 2008 年.)
- Wakefield, S., Yeudall, F., Taron, C., Reynold, J. and Skinner, A., “Growing urban health: Community gardening in South-East Toronto,” *Health Promotion International*, 22(2), 2007, pp.92-101.

**Exploring the potential capacity in campus community garden for making
intergenerative interaction opportunities:
focus on the role of university students.**

Masanari Sakurai

(Research Collaborators) Chie Kitagawa, Yohei Takeuchi, Yutaro Takizawa, Erika Takagi

Abstract: Community garden is defined generally as a land or activity that using local vacant land (public land or private land) local people plant agricultural products, fruit tree and flowers on their own initiative. Many studies have proved community garden has variety utilities for the community. This study analyzed the phenomenon of promoting intergenerational impacts. Additionally, we focused on the role of students in the type of campus community farm where are managed by university member or using their land. Particularly we explored the significance of existence and the effect of the students.

This study engaged in an action research as the type of community-based research by using the case of “*Oishi campus*” project in Ritsumeikan University Osaka Ibaraki campus. This research approach aims to connect the results with capacity development of them by dedicating them to examining their data and considering the results. We referred to Kolb’s experimental study approach for forming our research process.

By classifying and illustrating free answers of the inventory survey results to events participants, university students by quoting KJ method, a process of the interchange came to be uncovered. In addition, university students were able to learn their presence and roles by performing the analyses by oneself.

Keywords: Community garden, Intergeneration, University students